
天体観測

麻倉遥介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天体観測

【Nコード】

N5500Q

【作者名】

麻倉遙介

【あらすじ】

たった二人だけの天文部。

この夏が終わったら、解散することになっていた。

彼女 - 先輩は転校して、僕も転校して。

だから、これはきつと、

僕らの天文部、最後の活動。

時計の表示は「22:00」

左手に彼女を連れて、右肩に望遠鏡を担いで。

さあ、出掛けよう。

星空の、永遠の旅へ

22:00 (前書き)

エブリスタとの重複投稿です。

初心者ゆえ、語彙の足りない見苦しく稚拙な文章ですが、読んで頂けると幸いです。

校則には、「男女二人のみでの行動を禁止する」と書いてあった。もちろんそんな校則を守る、真面目というか律儀なヤツは僕の知る限りではいなかったけど。

特に僕らは、常習犯だった。

何かにつけては二人で行動して、校内では二人で一緒にいる時間の方が圧倒的に長かった。

そんな僕らが出会ったのは、今年の春先。

僕がまだ、世界の本質に気付くどころか触れてすらいなかった頃。

…まあ、その頃の話はまた、いづれ何処かで語ることにして。

僕は、肩にかけた望遠鏡がずり落ちないようにして、伸び始めた彼女との距離を縮めようと早足になる。

彼女は歩くペースが早く、ちょっとでも気を抜くとあっという間に離れてしまう。

その意図に気付いてか、彼女は意識して歩幅を小さくした。

「ごめん、速かった？」

「いや、僕が遅かっただけ」

「嘘」

「正解」

「また当たった」

「…すごいね、『必殺技』」

「でしょー!」

彼女はいくつか、「必殺技」なるものを持っていた。

彼女の必殺技、その1。

僕の嘘を一瞬で見破る。

まあでも、この場合、必殺技の有無に関係なく分かりそうなものだけだ。

というか、必殺技って字面的に合わない。

けれどそこは、あえてスルー。

必殺技問答は先日のに済ませてある。

結局僕は納得しなかったけれど、無理に掘り返すこともないだろう。

次の話題に移そう……そう思ったとき。

「君さ、よく、嘘つくよな」

突然の指摘に、一瞬、思考が停止する。

「どうして？」

再起動までそう時間はかからない。

「先輩がつかないだけ」

そう答えようとして、だけど僕は口を塞いで声にならないよう努めた。

彼女が「こういう」質問をする時は、必ず裏に何らかの意図が隠れていることを思い出す。

それが、ただの興味本意ではない、ということも。

彼女は、そういう人だった。

僕は、その意図を探し出さなくてはならない。

「それは」

今話さなくてもいいんじゃないか。

もっと、他のことを話そう。

そう言いたい。

けれど、その回答は彼女を失望させるのみに過ぎない。

それに、今回の場合、おそらくではあるけれど彼女の望む回答を、僕は既に知っている。

だから僕は、諦めて理由を話す。

「僕だから」

それは、もしかしたら言い訳にすらならない、きつと理由になどなりえない答え。

でも、今の僕にはこれ以上の回答がないように思えた。それを聞いて、彼女は。

「君は、変わらないんだね」

そう、微笑みながら言うのだった。

彼女は、僕の数歩先を歩き続ける。

一度緩めた歩調は、また、僕のそれよりも速くなっていた。

空は、赤と藍がない交ぜになった淡い紫色から、透明な光の射す黒に変わりつつあった。

肩に提げた望遠鏡のレンズに、夏の大三角が映る。

わし座のアルタイル。

白鳥座のデネブ。

琴座のベガ。

彼らの放つ輝きは、今の僕には、少しばかり眩しかった。

僕たち天文部の発足は、ちょうど三ヶ月前のこと。

発案は彼女だった。

『天文部、作ろうよ!』

思わず持っていたサイダーを落とす。

彼女の突発的な行動には慣れていたつもりだったけど、これは不意討ちだった。

『ねえ、どう? 天体観測とか、なんかリア充っぽくない?』

リア充というのが一体何なのか、当時の僕は知るよしもなかったけど。

そもそも彼女にとって、僕の意志というものはあまり重要なものではない。

その強引さは、人を惹き付けるのだろうか。

それはともかく。

彼女の強引な行動に、僕は逆らう術を持っていなかった。

……実を言うと一つだけあった。

でも、それはなんだか、反則技のような気がして。

だから、なのかな。

……そうなんだろうな。

僕は、首を縦に振っていた。

そうして僕は、彼女とともに「天文部」を作ることになった。

といっても、それは正式な部活ではなかった。

彼女は どうしてか、部活に入ることに拒絶反応を出していたからだ。

……ちょうど、三ヶ月前のことだ。

今、隣を歩く彼女は、三ヶ月前と何ら変わっていない。

人より何歩分も速い歩みや、かなり強引なところも。

どこか天然めいていて、不思議なところも。それでいて、何故か僕のことに関しては鋭いところも。僕はといえば、

「変わった、のかな」

……いや、変わってないんだろっな。

さっき、彼女が言ったばかりじゃないか。

けれど、「世界」は、変わってしまった。

僕を取り巻く環境、あるいは世界は、変わってしまった。

たった、三ヶ月で。

変化を強要されたのだ。

まったく、「待った」を言う隙さえなかった。

ガラガラ、と。

そんな陳腐な音が、体の中から聞こえた。

そんな気がした。

変わってしまった世界で、変わらずに存在している彼女。

そんな彼女が、少しだけ羨ましかった。

「ほら、着いたよっ」

彼女の声が、遠くから聞こえてきた。

いつの間にかまた、だいぶ距離が空いてしまっていたことに、今更ながら気付く。

僕は、ほんの少し急いで、彼女の元へ駆け寄る。

彼女は既に靴を脱いで、内履きに履き替えていた。

それに倣って、僕も靴を替える。

「遅いよー」

「ごめん」

「まあ、いいけどね」

「……静かにしよう。結構、音、響いてる」

僕達は今、学校に侵入している。

『部活するには、部室に行かないと』

これが大義名分だった。

不法侵入するには足りない気もするけど、気付かないフリ。

僕らの「部活」は、基本的に夜でないとできない。

抜き足差し足、二人三脚で、部室を目指す。

僕と先輩、2人だけの部室を。

重く錆び付いた扉を開けると、夏特有の生温かい風が肌を撫でた。見上げればそこには、満天の星空が広がっていた。ここが、彼女と僕だけの部屋 通称、屋上だ。ガチャン、と大きな音を立てて、背後で扉が閉まる。すると、隣からひゃつと声が上がった。

「……驚かさないでよ」

むっと突き刺すように視線を送ってくる。僕はそれを無言で押し返し、すぐに作業に取り掛かる。

「ちょっと、無視しないでよー」

無視はしていない。ただ、

「時間、間に合わなくなるよ」

「えっ？」

彼女は僕のケータイを引つたくと、

「もうこんな時間!？」

と、本日二度目の驚きを見せた。

その間にも、僕はてきぱきと望遠鏡を組み立てる。

「……できた」

組み立てるのはもう手慣れたもので、一分と経たずに完成する。

「準備できたよー」

そう言って、振り返ると……

「うわっ!?!」

床にレジャーシートが敷かれていた。

それだけじゃない。

クッションやら弁当やら、小物がたくさん並んでいる。

……彼女、確か、荷物を持ってなかったよな。

それに、ここには物を隠せるようなところはないし……

「あ、ご苦労さまー」

「……これ、どこから出したの?」

「うん? えーと……ねー」

うーん、と唸り声を出したかと思うと、ふいに、に入らつと笑って、

「ひみっ」

なんて、言う。

それはもう、満面の笑みで。

……ああ。

これには、敵わない。

彼女の必殺技、その2。

スマイル。

現在の記録、全勝無敗。

僕に対してのみの記録だけ。

「そっか」

「あれ、聞かないの？」

「……まあ」

彼女も、僕が勝てないの知っててやったんだろうけど。

でも、必殺技使ってまで隠しておきたいことなら、追及したりしない。

それに、本当は大したことではないのかもしれない。

素直に、『近くの教室に隠していたのを持ってきた』と解釈した。邪推するものでもない。

「君って、本当……」

「うん？」

「……なんでもないっ」

そう言うと彼女は、さっさと腰を下ろすと弁当箱を開けた。

「ほら、君も。ぼけつと突っ立ってないで」

ぼけつとなんかしてないけど。

催促されたので、僕は『いつも通り』に彼女の隣に座る。

「今日のは自信作なんだよー」

と差し出してきたのは、きれいな狐色に焼き上がった玉子焼き。

冷めているとは思えないような、食欲をそそる香りがする。実に、『美味しそう』だ。

「……食べないの？」

いぶかしがる彼女。

僕が箸を伸ばせないでいるからだ。

女の子の手作り弁当を頂けるような機会、平凡な高校生の僕が無下にしていいようなものではないだろう。

けれど、一度考えてみてほしい。

綺麗な薔薇には、トゲがある。

……つまり、そういうことだ。

驚くべきことに、これは必殺技ではないらしい。

「じーーーーー」

視線が僕に突き刺さる。

痛くて目を反らすしか、僕は対処法を持たない。

いぶかしむ視線が明らかな疑念の色に染まるのを肌で感じる。

受け流すことが叶うならばそうしたいが、残念ながら僕にはそんなスキルはない。

観念して、箸に手をつけようとする　　が、伸ばした手は空をつかんだだけだった。

ふと、さっきとは違う視線を感じる。

目を上げると、そこには、箸を持ってイタズラな表情を浮かべた彼女がいた。

……まさか。

「自分で食べられないなら、私が食べさせてあげる」

そう言って、笑顔のまま口の端をニイと釣り上げる。

僕は、知らぬ間に大凶を引き当ててしまったようだ。

彼女はその手に握った二本の杭で卵をつまみ上げ、僕の口に近づける。

それを避けようとする僕の背中にフェンスが当たった。
普段は気にとめることはなかったが、このフェンスは頑丈にできて
いる。

落下者防止用の安全装置、そういった面においてはひどく優秀なん
だろう。

しかし、今の僕には脱獄不可能な牢獄の檻であるかのように思えた。
じりじりと玉子焼きが近づいてくる。

「はい、あーん」

これほど残酷な『あーん』があるだろうか。

逃げ場はなくなり、玉子焼きとの距離は、わずか15センチ。

もうダメだ　そう悟ると、なんだかキリストが左の頬を差し出し
た理由がわかった気がした。

僕は心の中で両手をあげ、口をあける。

「あ、あーん……」

そして、玉子焼きは僕の口の中へ。

すると、玉子焼きは一個の爆弾と化し、体内から身を切り裂くよう
な痛みを全身に弾けさせる　ことは、なかった。

二度、三度と咀嚼する。

魚介系のダシが卵とうまく調和し、見事なハーモニーを生み出して
いる。

中に入っている刻みネギもいい具合にアクセントになり、クセを感
じさせない。

これは……

「……おいしい」

「でしょー」

彼女が、少しばかり発育の足りていない胸を誇らしげに張る。
信じられない。

かつて僕を輪廻の彼方へと連れ去ろうとした玉子焼きの形をしたナ
ニ力を作ったのが同一人物だとは。
得意満面の彼女は、次は何を食べさせようかなーといった感じに箸
をさまよわせている。

けど、これは……

「ねえ、次はどれ食べたい？」

「そうだな……」

色とりどりの弁当箱から、僕はひとつ、気になったものを選んだ。

「唐揚げ、もらっていい？」

「どうぞどうぞ」

またしても『あーん』で食べさせられる。

……顔、近いつて。

「おいしい？」

「……うん、おいしい」

口をもぐもぐさせながら答える。

やっぱり美味しい。

けど、どこか引っかかる。

……あ、そうか。

「ねえ」

「?? 何したの? ……あ、私の弁当がおいしすぎて、惚れ直し

「ちやった？」

「いや、僕も弁当、持って来たんだ」

望遠鏡と一緒に持ってきたカバンをがさごと漁り、弁当箱を取り出す。

『否定しなくてもいいでしょ……』とか聞こえてきたけど、まあ気にしない。

「出来合いの詰め合わせだけだね」

「わぁ……」

フタを開けてみせると、彼女はキラキラと目を輝かせた。

昼食用にと作ったチャーハンと、いくらかの野菜。それと……

「……あ」

気づいたか。

弁当箱の中には他に……唐揚げを入れていた。

ただの唐揚げではない。

誰でも簡単に、かつ美味しくつくれる、夢の食品。

「冷凍食品の」唐揚げだ。

時間がなくて、急いで詰めたのだけだ。

「……」

彼女、手が震えてる。

遭遇しちゃいけないものを見たような、隠してた秘密が親にバレた子供みたいに。

顔も青ざめ、口元があうあういつている。

……やっぱり。

「食べないの？」

彼女の前に弁当箱を差し出す。

ついでに唐揚げを妻みとって、口に放ってみる。

「うん、おいしい」

わざとらしく言ってみる。

……うわ。

彼女、少し涙目になってる。

「あー！」

「え？」

いきなり彼女は叫び、僕は持っていた弁当箱を引っ込めてしまう。

「ほら、もうそろそろ時間じゃない？ 早く弁当食べちゃわないと！」

そう言っただけで彼女は、自分の弁当を一気に平らげてしまった。

少し涙目で、口元をこもこもとしている。

ハムスターみたい。

「……ほら、早く食べちゃってよ」

やっとのことで嚙下すると、彼女は恨みがましそうな目をして言った。

「そっだね」

僕も弁当の消化に取りかかる。

……もったいないことしちゃったなあ、なんて、ちよっと後悔。
絶対に言わないけど。

時計の針は、夜の11時を差そうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5500q/>

天体観測

2011年12月13日02時13分発行